



## 特集の狙い

**研** 究者、特に、人文・社会科学系の大学教員は、研究の成果を、単著として発表することが重要な成果となる。これが、理系の教員の場合は、学生との共著を含め複数人との共同研究として、比較的短い査読付き論文として発表することが重要な成果となる。実験系の論文の場合には、多い時には数十人の著者が名を連ねることもあり、Nature や Science などの自然科学系の有力論文誌の

場合、論文の採択率が数パーセントということも多い。このように文系と理系とでは、研究に対する慣習とアプローチが大きく異なる。口の悪い文系研究者は「理系の間人は、あんなに短い論文を大勢で書いて成果としている」と、逆に、口の悪い理系研究者は「文系の間人は査読も受けずに勝手に著書を出版している」というような陰口をたたいたりする。

千葉商科大学では、他大学と同様に、教

員に対して出版助成を行っており、特に人文・社会科学系の教員が研究書籍や作品を発表する活動に対して資金を提供している。これは、各研究者が提出した申請書の内容を審査委員会で審査したうえで決定される。

なぜこのような制度が必要かという点、最先端の研究を専門書として出版しようとしても、なかなか売れる書籍とはならず、出版社が二の足を踏むからである。このような専門書は、1冊3000円から5000円程度で販売される。本1冊の出版費用が200-300万円程度かかることを思えば、1000部程度以上の売上が見込まれないと出版できない。であるから、出版助成という制度は学問の発展のためにはなくてはならないものである。

一方、新進気鋭の研究者が著す最先端の研究書は、背景知識が十分ないと理解しがたく、なによりも門外漢にとっては記述が難しくなりがちである。

いささか前置きが長くなってしまったが、本号では、本学の研究助成のもとで、最近発刊された著書の中から、読者のみなさまの興味を引きそうなものを選び、著者の方々になるべく易しく研究の内容を伝えていただくこととした。これらはすべて著者の博士論文に基づくものであり、本学の若手研究者の研究の最先端を紹介するものとなっている。しかし、博士論文は、各分野の専門知識を前提とするので、一般読者には理解が難しい。そこで、さらに、内容の理解を深めるために、それぞれの著書に対して、斯界の権威者の方々に書評をお願いした。

第一報告では、中村優介先生は、第二次大戦後の政治に焦点をあてて、特に、フランスが連合国管理理事会のメンバーに参加した経緯について、イギリスの記録をもとに考察している。この内容については、荒川敏彦先生に書評をいただいた。

第二報告では、西井真裕子先生は、マーケティングにおける五感の役割の重要性を論じている。「感覚マーケティング」という領域に新しい知見をもたらす興味深い研究成果である。こちらについては、いささか門外漢ではあるものの、寺野隆雄が書評を書かせていただいた。

第三報告では、戸川和成先生は、東京の都市政策の在り方について、地域振興と市民活動の観点から詳細に論じている。東京23区内に存在する格差を是正するために、市民社会組織の役割が重要であるとの指摘には頷かされる。書評は、樽見弘紀先生にお願いした。「良い論文」「開かれた論文」という記述には感銘を受ける。

第四報告では、藏田幸三先生は、情報通信技術に関する日米の政策の相違とそれを生み出す形成過程について論じている。国家戦略という一段と高い視点から情報通信技術に接近したユニークな内容である。書評は小倉信次先生にお願いした。本書の分析結果が今後の研究に与える影響について示唆をいただいている。

以上、特集のねらいと概要を紹介した。この種の博士論文に基づく専門書の難しさにたじろぐ方も多いと思う。そこをぜひ乗り越えて、本号の紹介記事により、専門分野の新たな息吹を感じ取っていただければ幸いである。紹介した専門書を購買まではしなくとも、図書館などで手に取っていただければ、そして、さらに感想などを寄せていただければ、本号の著者・評者・編者の望外の喜びとなる。また、これから博士論文をまとめようとする方々や学内外の出版助成を求める研究者にとっても本特集の内容は非常に有用と考える。

千葉商科大学総合研究センター長 副学長  
基盤教育機構長

**寺野 隆雄**  
TERANO Takao